

片桐 洋一（かたぎり よういち）

昭和6年9月5日，大阪市生まれ。

昭和34年京都大学大学院博士課程修了。

現職 大阪女子大学教授。

平安時代文学の成立・享受・伝流について
数々の研究業績をあげる。

著書は『伊勢物語の研究』（研究篇・資料篇，
明治書院）『鑑賞日本古典文学 伊勢物語・
大和物語』（角川書店）『中世古今集注釈書
解題』（既刊四巻，赤尾照文堂）『全対訳日
本古典新書 古今和歌集』（創英社）『歌枕
歌ことば辞典』（角川書店）『小野小町追跡』
（笠間書院）ほか多数。

現住所 〒661 尼崎市立花町3-26-9

恋に生き 伊 勢
歌に生き

日本の作家 7

昭和60年8月10日 初版発行

定価 1,500円

昭和61年6月20日 4版発行

著者 片桐 洋一

発行者 松本 輝茂

発行所 株式会社 新 典 社

東京都千代田区西神田3-5-6 大坂ビル

TEL 東京 (03) 265-3781, 3863

振替口座 東京 7-26932 〒 101

検印廃止，不許複製

（株）萬友社，牧製本印刷（株）

ISBN 4-7879-7007-0 C 0395

日本の作家7

片桐 洋一

恋に生き
歌に生き

伊

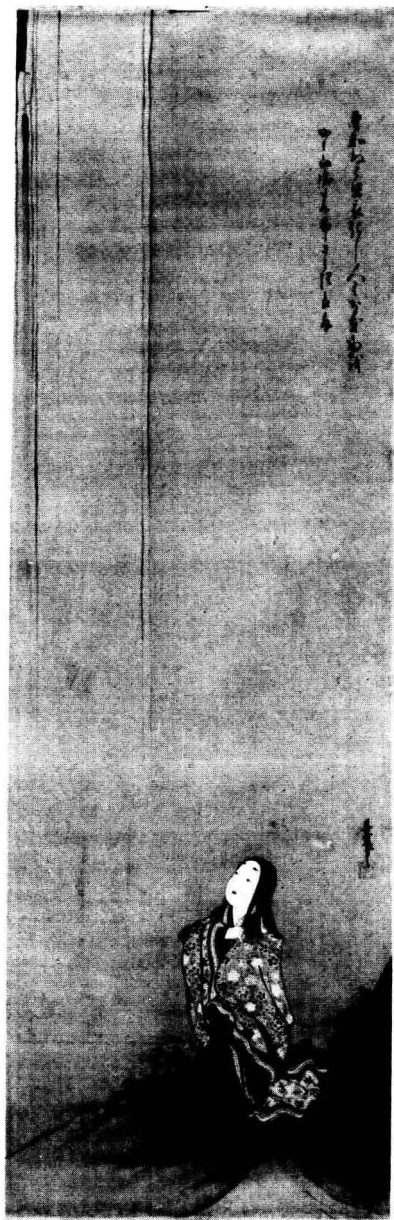
勢

新
典
社
刊

編集委員

秋山虔・有吉保・犬養廉・井上宗雄・岡保生・片桐洋一・片野達郎・
木俣修・小林茂美・今栄蔵・神保五弥・塚原鉄雄・橋本不美男・藤平春男

たちぬはぬ衣きし人もなき物を
なに山姫の布さらすらむ



住吉具慶筆「伊勢観瀑図」(東京国立博物館所蔵)

絹本淡彩 九四・五×三二・一センチメートル

住吉具慶(一六三一—一七〇五)は住吉如慶の長男。幕府の御用絵師。和歌・物語など古典文学を題材にして精細にして鮮麗な絵を多く描いた。この図は龍門の滝で歌をよんでいる場面。(六〇ページ参照)。

伊勢（いせ） 生没年未詳。十世紀初頭に成立した『古今集』の時代に活躍した女流歌人。本名は不明。父親は文章生の出身で参河守・伊勢守・大和守などを歴任した藤原繼蔭である。伊勢という女房名は、父親が伊勢守になった仁和元年（八八五）から大和守に任ぜられた寛平三年（八九二）までの間に出任したためにつけられたものであろうが、おそらくは仁和四年（八八八）に関白太政大臣藤原基経の娘温子（のちの七条の后）が宇多天皇の女御になった前後に出仕、温子の作歌のお相手をするようになったのだと思う。

出仕した伊勢を待ち受けていたのは、貴公子たちの懸想である。中でも、女御の弟の藤原仲平と兄の時平のそれは、はなはだしく熱烈であった。しかし、温子の夫である宇多天皇の寵を得て皇子まで産んだことが伊勢の生涯において最大の名誉であったようである。

だが、その皇子も幼くして世を去り、続いて伊勢がもっとも敬愛していた温子皇后が崩じ、その娘の均子内親王も世を去ってしまう悲しい日々の連続。その中で、伊勢は、当時最高のプレイボーイといわれた中務卿敦慶親王の寵を受け、一女中務をもうけていた。

伊勢の異性関係は、このようにまことに華々しいものがあつたが、彼女が歴史に残るのは、その恋愛の華々しさのせいではない。和歌のすばらしさのせいである。平安時代第一の勅撰和歌集である『古今和歌集』では小野小町を抜いて女流歌人として最多の歌が採られているし、五十年後の『後撰和歌集』、

さらに五十年後の『拾遺和歌集』においても女流では一位である。『拾遺和歌集』が撰ばれたのは、伊勢の没後六十数年たった頃であり、ちようど、和泉式部・清少納言・紫式部などの女流文学全盛の時代である。伊勢の歌の、女であるゆえの美しい言葉と、女であるゆえの深い嘆きが、彼女らがなした文学にも深い影響を与えていることは確実だと思われるのである。

目次

伊勢の輪郭	五
主要人物解説	〇
伊勢略系図	二
第一章 伊勢との出会い	
なには渦みじかき葦の	一三
『源氏物語』における歌人伊勢	一五
第二章 出自と生年	
父は藤原継蔭	二八
伊勢は西暦八七二年生まれか？	三一
第三章 宮仕えと恋人たち	
『伊勢集』とその伝本	三八
初恋の人藤原仲平	四三
兄なる男藤原時平	六七
再び仲平のこと	八三

大臣の智もう一人……………八九

『平中物語』の主人公……………九五

第四章 宇多天皇と七条の後

皇子出生……………一〇三

宇多天皇の出家……………一二二

皇子夭逝、平中弔問……………一二六

限りなくめでたき后……………一二〇

『古今和歌集』に和歌を献進……………一二五

后の宮との別れ……………一三〇

第五章 七条の後サロンの文華

屏風絵と物語……………一三九

菟原処女の物語絵……………一五七

第六章 中務卿敦慶親王

中務の父、敦慶親王……………一六八

『大和物語』の敦慶親王……………一七〇

敦慶親王と伊勢……………一七九

第七章 伊勢における恋歌の構造

涙	一九一
「つらし」と「うし」	一九六
召人・使人	二〇一
比喻から象徴へ	二〇五

第八章 王朝最高の専門女流歌人

屏風歌と専門歌人	二一五
亭子院歌合と春日歌合	二二六
その後の伊勢	二四〇
晴の歌の歌人伊勢	二四九
伊勢の歌、その本質	二五八
『伊勢集』を読む人のために	二六五
— 参考文献の紹介などを雑談風に —	
関係年表	二七一
和歌初二句索引	二七七

主要人物解説

藤原継蔭 生没年未詳。伊勢の父。藤原北家の右大臣内麻呂の子孫だが、当時の最高権力者たちが左大臣冬嗣の流であるのと異なつて、その兄の参議真夏の四代の孫にあたる。文章生から参河守・伊勢守・大和守と地方官を歴任した。寛平三年（八九）大和守になってからの事蹟は不明である。

宇多天皇（宇多上皇・宇多法皇・亭子院） 貞観九年（八六七）→承平元年（九三二）。光孝天皇第七子。一度臣籍に降下して源氏となつたが、仁和三年（八八七）に親王となり帝位についた。寛平九年（八九七）醍醐天皇に譲位し、昌泰二年（八九）に出家して諸所で修行を積んだが、京極御息所を愛して三児をもうけるなど、その後もし盛んな生活ぶりであつた。承平元年、仁和寺で崩じた。六十五歳。

藤原温子（七条の后） 貞観十四年（八九三）→延喜七年（九〇七）。関白太政大臣藤原基経の第三女。時平は兄。仲平は弟。醍醐天皇の后となつた穩子は妹である。仁和四年（八八八）に宇多天皇の女御。寛平九年（八九七）には醍醐天皇の養母として皇太夫人となり中宮と呼ばれた。『伊勢集』によつてもそのやさしい人柄がしのばれるが、生来病弱であつたらしく延喜七年に三十六歳で薨じた。

藤原仲平（枇杷左大臣） 貞観十七年（八九五）→天慶八年（九四五）。関白太政大臣基経の息。時平・温子の弟、忠平・穩子（醍醐天皇后）の兄である。権門の御曹子であるのに昇進は遅く、参議になつたのは延喜八年（九〇〇）、大臣になつたのは承平三年（九三二）で、共に弟の忠平より著しく劣っている。風流な人物であつたらしいが政治的才能は劣つていたのであらう。伊勢の最初の恋人。長生きして天慶七年に七十一歳で薨じた。

藤原時平（本院左大臣・贈太政大臣） 貞観十三年（八九三）→延喜九年（九〇九）。関白基経の長男。温子・仲平・忠平・穩子（醍醐后）の兄。京極御息所の父。仁和三年（八八七）に十七歳で頭中將になつたのをはじめ官位の

昇進はまことに著しく、寛平九年（八七）には二十七歳で大納言、左大将、藤原氏の氏の長者となった。昌泰二年（八九）にはさらに左大臣となったが、延喜九年、三十九歳で夭折した時には、失脚させた右大臣菅原道真の怨霊のせいとされた。伊勢を弟の仲平と争った。

均子内親王（女一の宮） 寛平二年（八六）→延喜十年（九〇）。宇多天皇と七条の後温子との間に生まれた皇女。

異母兄の敦慶親王の妻となったが、延喜十年に二十一歳で薨じた。伊勢は一時この人に仕えていたようである。敦慶親王（中務卿親王・式部卿親王） 仁和三年（八七）→延長八年（九三）。宇多天皇の第四皇子。醍醐天皇

の同母弟。早くから中務卿の職にあったが、延長二年（九四）に式部卿に転じた。正妻の均子内親王は異母妹だが、そのほか同じく異母妹の孚子内親王など多くの女性と交渉があり、プレイボーイとして有名であった。

しかし堤中納言兼輔や三条右大臣定方を中心とする歌壇の中心人物であり、文化的にも当時を代表する人物であった。伊勢と交渉を持ったのは延喜十一年（九一）頃であつたらしく、間もなく二人の間に娘の中務をもうけた。延長八年に四十四歳で薨じた。

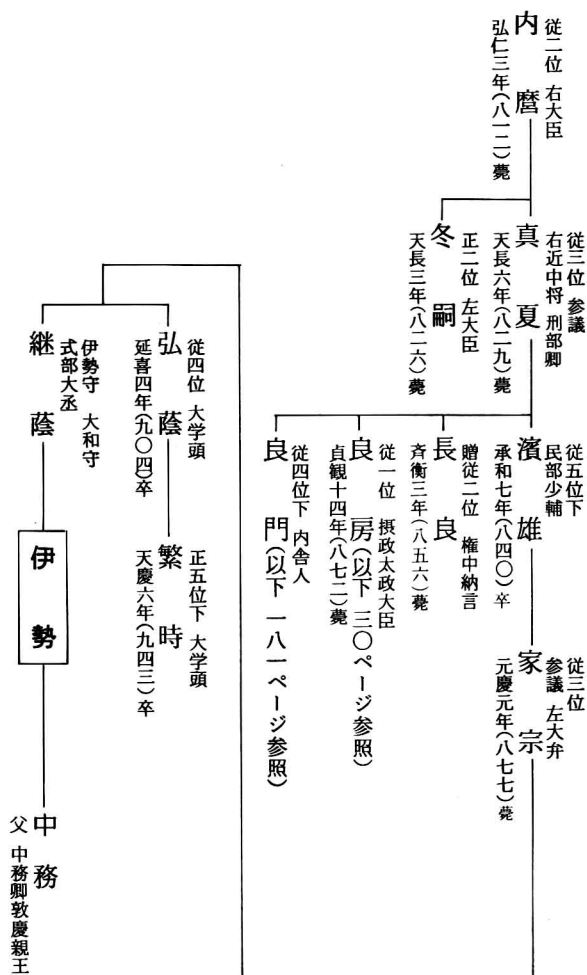
中務 生没年未詳。伊勢と中務卿敦慶親王の間に生まれた娘。延喜十二年（九三）頃の誕生と推定される。父母

ともに才能と美貌に恵まれていたせいか、彼女も九〇年代後半の最高の女流歌人としての位置を保ち、源信明ほか数多くの貴紳と恋愛関係があつた。長生きして永祚元年（八九）以降、八十一歳以上で他界した。

平貞文？→延長元年（九三）。『定文』とも書く。桓武天皇五代の孫。従四位平好風の息。『平中物語』の主

人公とされ「平中」と呼ばれているほか、『大和物語』その他でも色好みとして扱われているが、在原業平に比べて、消極的で滑稽な色好みというイメージである。現に伊勢にも軽く扱われている。寛平三年（八七）内舎人に、延喜十九年（八九）には左兵衛佐に任じられているが、従五位が最高位階であつたらしい。歌人として知られ、自邸で数度の歌会を催している。

伊勢略系図



第一章 伊勢との出会い

なには渦みじかき葦の

その十二月八日には、太平洋戦争に突入する昭和十六年（一九四一）のころ、私は旧満洲奉天市（今の中国東北部、瀋陽）の日本人街に住む小学校四年生の少年であった。戦争の影響もあったが、当時職業野球と呼ばれていたプロ野球の人気はいまだしで、私たちの娯楽と言えば、冒険小説・少年講談などを中心とする読書か、親とともに見るなら許されていた映画観賞（両親ともに映画好きであったのは幸せであった。若き日の原節子・水戸光子・三浦光子など、はっきりと覚えている）、それに大相撲であった。特に大相撲は、まずラジオの実況中継にかじりついて聞き、場所が終わって映画館で上映される大日本相撲協会撮影の記録映画を見て確認し、『相撲』という雑誌の各場所（といっても一月と五月の二場所だが）特集号でさらに情報を仕入れ、毎年七月頃にやって来る大相撲満洲場所と称する地方巡業で本物の力士を見るという傾倒ぶりであった。

連勝記録こそ六十九で安芸あきの海にストップされていたが、双葉山の全盛時代はなお続いており、少年たちは、それにあこがれてみずからの相撲協会を作り、双葉川とか双葉錦とかのまぎらわしいシコ名をなのって対戦し、番付を作り、星取表を作って楽しんでいたのであるが、その頃から、ポーズだけは「一般大衆」と一線を画していた私は「双葉——」とは名のらず、大阪出身であることを理由に浪花瀉ななわがたというシコ名で名力士ぶりを発揮していた。

そんなある日、近所に住む友人の自称双葉川関の母上に「いい名前ね。宝塚みたいね」とはめられたのだが、その意味がやっとわかったのは、敗戦後、日本へ引き揚げて来てからのことであった。

当時、宝塚のスターには、天津乙女あまつおとめをはじめ、浅茅あさぢしのぶ、霧立きりたちのぼるなど、「百人一首」から名前をとることが多かったので、私のシコ名の浪花瀉ななわがたも、

難波瀉なにわがたみじかき葦あしのふしのまもあはでこの世を過ぐしてよとや

という歌によったと双葉川関の母堂は思っていたのだということが、やっとわかったのであるが、小学生時代はもちろん、引き揚げて来た中学生の頃にも、この歌の作者である伊勢についての知識や関心はほとんどなかった。作者の伊勢が、平安時代の文学史の上で、きわめて重要な人物であるということがわかって来たのは、なんと大学に入って国文学を専攻しようかと思

うようになり、『源氏物語』をやや注意深く注釈書などにあたりながら、読むようになってからのことであるから、いささかはずかしい思いがしないわけでもない。

『源氏物語』における歌人伊勢

野分^{のわき}だちて、にはかに肌寒^{はだ}き夕暮^{ゆふぐれ}のほど、常よりも思し出づること多くて、^{ゆげのみなうぶ}靱負^{ひき}命婦^{めいふ}といふを遣はす。夕月夜^{ゆふづくよ}のをかしきほどに出だし立てさせたまひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊^{みあそび}びなどせさせたまひしに、心ことなる物の音^{おと}を掻^かき鳴^ならし、はかなく聞こえ出づる言^{こと}の葉^はも、人よりはことなりしけはひ容貌^{かたち}の、面影^{おもかげ}につと添^そひて思さるるにも、闇^{やみ}の現^{うつ}にはなほ劣^{せう}りけり。

で始まる靱負^{ゆげい}の命婦^{めいふ}が桐壺^{きりぼ}の更衣^{こうい}の母を訪問する場面は、『源氏物語』桐壺の巻の中でも特に有名である。

最愛^{ひと}の女であつた更衣を先立たせた帝^{みかど}は、靱負^{ゆげい}の命婦^{めいふ}に命じて、今は亡き更衣の忘れ形見を養育する更衣の母を吊問させる。母君の邸の描写も抒情的ですばらしいが、命婦が内裏へ帰参して帝^{みかど}にその趣^{おもむき}を奏上する場面もよい。

命婦は、まだ御殿籠^{おほどのこも}らせたまはざりけると、あはれに見たてまつる。御前^{おまえ}の壺前栽^{つばせんざい}のいと